

平成26年12月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859）

埋土種子に刻まれた土地の歴史

埋土種子とは、文字通り「土に埋もれている種子」のことです。英語では seed bank（シードバンク）と呼びます。土の中には、発芽の条件が訪れるのを待ちながら眠っている種子が、たくさん埋まっています。有名な大賀ハスは、2千年前の遺跡を発掘した時に発見された種子から発芽したものです。土中から掘り出されて発芽の条件下で育てられ、2千年の眠りから覚めて花を咲かせた例です。

ヌルデはウルシ科の木で、昔は塩の代用品として使われたり、「霊力の宿る木」として魔除けに使われたり、葉先に出来る虫こぶは乾燥させたものを五倍子と呼び染料・写真現像液・インキ・白髪染めなどに使われてきました。この木はパイオニア樹種で、伐採跡地などに真っ先に出て来ます。実は、この木の種子は蠟物質で覆われていて、蠟が融けないと発芽できないしくみになっています。どういう時に蠟が融けるかというと、山火事があった時や周りの樹木が伐採されて地表に直接陽が射すようになった時です。それまでは種子は地中で眠っています。土中で眠った状態でどの位生きていられるかは、種により異なるようですが、40～50年生き続けられる種は、ざらにあるようです。

勝沼・根ヶ布・黒沢にまたがる永山北部丘陵は長らく住宅開発計画がありましたが、開発計画が頓挫し、この土地を青梅市が買収して特別保全緑地に指定して「青梅の森」となっています。40年ほど手入れが行われず放置されてきた森林の整備が始まっています。エリアによっては皆伐して若い林を再生する取り組みも行われています。いずれも、1960年代後半から70年代前半の時期に、当時の薪・炭から化石燃料である石油へのエネルギー源転換により放置されることになった薪炭林、薪・炭の需要が無くなったのでヒノキを植栽したが、そのまま放置されてしまった林、優勢木であったアカマツが松枯れで衰退した後に成立した林などです。

このような場所では、皆伐跡地にオカトラノオ・ハギなどが出現しています。いずれも伐採前の森林内や近辺には無かったので、埋土種子からの発芽と思われます。そろそ

る季節に応じて花を咲かせてくれるでしょう。伐採跡地の草原環境に、どのような植物が出て来るかは、大変興味深いものです。埋土種子から発芽してくる植物は、50 年前のその土地がどのような環境であったかを教えてくれます。

根ヶ布の北谷津では、ヨシが密集する水田跡地の整備も始まりました。湿地の場合は、堆積物に覆われた表土 5 cmを剥ぐと、埋土種子が眠る土の層が出て来るといわれます。湿地保全の作業の進行に伴いながら、どんな植物が出て来るか楽しみです。ハナショウブの原種である在来種のノハナショウブや、昔の畦跡地にコオニユリが出て来ないかと期待は尽きません。

(文責 久保田繁男)